

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862179

研究課題名(和文)ドメスティック・バイオレンス被害女性の育児における困難感と回復を促す支援

研究課題名(英文)Study on support of postpartum difficulties and promoting recovery of Intimate partner violence victims while rearing children

研究代表者

藤田 景子(FUJITA, Keiko)

金沢大学・保健学系・助教

研究者番号：60587418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：DV被害を受けている母親は、加害者との同居中、母親なのだからと育児を押し付けられ、うまく子育てができないことを自分のせいであると思いつまされながら生活をし、DV関係の不自然さに気づきづらかったり、逃げて身を護るという選択があることを考えにくかったりする構造があることが明らかになった。さらに、加害者と離れても、傷は根深くDV被害を受けた女性や子ども達の心や体に不調をきたし続けた。一方で、支援者よりDV被害母子の支援は、長期に他職種と連携する必要があることも明らかになった。今後、保健医療機関及び地域におけるDV被害を受けた母子の早期回復支援・連携システムの構築の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：During child-rearing, DV perpetrators force mothers to take care of children, saying that 's the mother's job. Those mothers are easily lulled into the idea that it 'll be their fault if child-rearing doesn't go well. They face difficulty finding work and become self-reliant when raising children. Therefore, it can be assumed there is a structure that makes it hard for those mothers to realize just how unnatural it is to be in a violent relationship as well as the choice to run away for protection. The problems of DV do not just disappear after victims separate from perpetrators. The wounds are deep and victims continue to suffer physically and mentally from it. Furthermore, Support of Mothers and children who abused take long term and need cooperate with many other professional which support mother and children. It is necessary to build systems of support and promote mothers and children who abused early recovery and cooperate in medical settings and community.

研究分野：助産学、母性看護学、ウィメンズヘルス

キーワード：ドメスティック・バイオレンス 子ども虐待 子育て 困難 支援 回復

### 1. 研究開始当初の背景

2012年の内閣府調査において、3人に1人の女性が、身体的暴力、恐怖を感じるような脅迫等の心理的暴力、性的な行為を強要されるといった性的暴力のいずれかを受けており、20人に1人は「死ぬかもしれない」と思う程の暴力を受けていることが明らかになっている(内閣府男女共同参画局, 2012)。

乳児4ヶ月健診に来所した母親を対象に行った2006年の藤田の研究においても、妊娠前もしくは妊娠中のいずれかに暴力を受けた経験があった母親は16.8%であり、夫婦が子どもを授かる妊娠期から既に約4人に1人の女性がDV被害を受けていることが明らかになっている。

DVは、身体的な暴力による怪我にとどまらず、婦人科系、消化器系、心臓血管系の身体的健康障害(Campbell, 2002)や、パニック発作、自殺企図(甲村, 2001)、睡眠障害、不安、抑うつ、自尊感情の低下(片岡他, 2005)といった精神的健康障害と関連があることが報告されている。DVにさらされる子どもへの影響としても、子どもの問題行動、多動、不安、学習困難などの比率が著しく高いとの報告もある(Gleason, W, 1995)。さらに、DVがある家族の子どもの虐待リスクは高くなり、DVのある家庭では、子どもへの虐待発生を70%増加させるとの報告もあり(Tajima, 2000)。藤田の調査研究(2012)において行った「DV被害女性の被害からの回復過程と周産期の看護援助」でも、DV被害女性自身も両親にDVがあり、自身も虐待経験があるといった発言も聞かれ、どのように子どもを育てたらよいのかわからないといった発言も聞かれた。この問題の先には、DVの世代間連鎖(Mckinney, et.al, 2008)という大きな社会問題も控えており、DV被害母子が早期に心身ともに回復のプロセスを歩めるように支援を行っていく必要がある。

ここ数年、女性や子どもに関与する専門職は、DVへの関心を次第に高めているが、我が国におけるDV被害者である母子への支援の現状は、DV被害を受けている女性や子どもが多いにも関わらず、具体的な支援方法を持ち合わせていない。特に、日本における母子保健システムは妊娠期から乳児期、そして学童期にある母子を支援することが可能であり、DV被害女性や子どもの回復に向けた支援やケアが期待できる。しかし、加害者と同居中および別居後のDV被害女性の子育てに関する具体的な困難感や子育て支援に関するニーズを明らかにし、DV被害者である母子の早期回復に向けた保健医療関係者の具体的な支援方法を明らかにした研究は見当たらない。

### 2. 研究の目的

加害者との同居中および別居後のDV被害女性の育児に関する現状や困難感及びニーズについてや、女性及び子どものDV被害からの回復を促す支援方法について明らかにし、DV被害を受けた女性や子どもの回復を促す支援システムの構築について検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

以下の項目を行った。

1) DV被害女性の育児の困難感及びニーズ、子どもへの影響について

(1) インタビュー調査

DV被害女性の子育ての困難に関する概念の整理をし、インタビューガイドの検討及び作成を行った。

研究協力者：過去にDV被害を受けた経験があり、現在は加害者と離れ、子育てをしている女性。DV被害を過去の事として回想し話ができる女性とした。

調査：育児に関する困難な事や子どもの様子、生活に関するインタビューガイドを用いた半構成インタビューを行った。

データ分析：DV被害女性の育児の困難感やニーズ、子どもへの影響の視点から、質的記述的に分析を行った。

(2) 質問紙調査

(1)で明らかになった内容を中心に、DV被害女性の育児の特徴を明確にするために、自己記入式質問紙を用いた調査を行った。

研究対象者：パートナーからの暴力被害を受けた経験のない子育て中の女性。パートナーから暴力被害を受けた経験のある女性。DV被害を受けた経験があり、現在は加害者から離れ、子育てをしている女性。

データ分析：分析には、SPSSを使用し、基本属性の割合を $\chi^2$ 検定とMan WhitneyのU検定で比較し、DVなし群、DVあり群についてロジスティック回帰分析を行った。

2) 母子の支援方法と関連機関との連携について

研究参加者：周産期およびその後の母子支援に関わっている看護師(助産師等)や、子育て広場や民間の子育て機関で支援を行っている支援者。

調査：周産期および子育て支援現場で母子の支援者が、DV被害者等の社会的ハイリスク母子の観察や支援、その後の関係機関と連携の視点から、現状や課題についてインタビューガイドを用いた半構成インタビューを行った。

データ分析：質的記述的に行った。

なお、本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て行った。

#### 4. 研究成果

##### 1) DV被害女性の育児の困難感及びニーズ、子どもへの影響について

###### (1) インタビュー調査

研究参加者は、DV被害を受けた経験のある母親20名であった。

）DV加害者と同居中に、暴力に曝されている子育て期の母親と子どもの生き抜く様子について

4つのメジャーテーマが明らかになった。

＜父親のいない子どもにはいけないという母性神話に苛まれながらDV関係に踏みとどまる母親＞、＜子どもを育てるために子どもが育つために、夫を怒らせないように生活しながらDV関係にとどまる母親＞、

＜DVを目撃することで心が掻き乱される子どもと共にDV関係に踏みとどまる母親＞、＜安心で安全な居場所がない生活の中でもDV関係にとどまる母親＞。

DV被害を受けている母親は、子どもが生まれれば誰も母親として育てることが当たり前として見られ、母親はこうあるべきといった母親像を押し付けられていると感じていた。そして、夫やその家族から子育てについて責められ、安心できる居場所のないまま、どのように子育てをしてよいのかわからず孤立無援の中で、苛立ち、焦り、頭から離れない日常的なDVにもがき苦しんでいた。夫に暴力を受け、子育てにもがきながらも母親は「子どもを片親にはいけない」とDVに曝される中、子どもと共に必死に生きていた。

子育て期には、加害者から母親なのだからと育児を押し付けられ、うまく子育てができないことを自分のせいであると思込まされやすいことや、子どもを抱え社会で働き経済的にも自立が難しいことから、DV関係の不自然さに気づきづらかったり、逃げて身を護るという選択があることを考えるに苦しかったりする構造があると考えられる。DVによる子どもへの影響も甚大であり、母親が早期にDV被害に気づきその関係から回避できるよう、専門支援機関とつながりながら日常生活の支援をしていく必要性が示唆された。

）日本における加害者と別居後の子どもを抱えているドメスティック・バイオレンス被害者の体験と別居後も続くDVによる子どもへの影響について

別居後に関して、10のテーマが明らかになった。

DV被害者は＜別居後も夫が近くにいるような恐怖に襲われる＞、＜友人や知人との関係性が切れることによる孤独より強く

感じる＞、＜欲しい情報がどこでもらえるのかわからず奔走＞、＜シングルマザーとして子どもを養うために自分の時間もなく動き回っている＞状況であった。さらに、DV被害者は＜子どもと夫が似ていることからくるフラッシュバックに苛まれる＞、＜子どもをDVに巻き込んだ罪悪感に苦しむ＞中で生きていたが、少しずつ＜自分が安心できる居場所を得る＞経験をしていた。また、別居後も続くDVによる子どもへの影響として、＜暴力に曝された生活から解放された反動により子どもの心身が不安定になる＞、＜暴力に曝された生活から解放され子どもが加害者のように暴力化する＞ことが明らかになった。しかし、＜別居後子どもの表情が和らぐ＞と語ったDV被害者もいた。

加害者と離ればDVの問題は解決するのではなく、傷は根深く別居後もDV被害を受けた女性や子ども達の心や体に不調をきたし続けていた。DVは健康問題でもあり、看護者として、DV被害女性や子ども達が早期に健康を回復し、安全で安心できる生活を取り戻せるよう、DV被害を受けた母子の状況を理解し支援していくことが重要であることが示唆された。

###### (2) 質問紙調査

(一般群)子育て広場、保育園、助産所等において、DV被害を認識していない、もしくはDV被害を認識していても加害者と同居している子育て中の女性400人に配布し、274人(回収率68.5%)より回答を得た。また、(DV群)DVシェルターや母子生活支援施設において、DV被害を受けていたことを認識しており、現在加害者と別居している子育て中の女性35名に調査依頼をし、25名(71.4%)から回答が得られた。

一般群において、幼少期に両親の暴力現場を見た経験のある人は、63名(23.0%)であった。また、幼少期に両親から暴力を受けた経験のある人は、55名(20.1%)であった。現在、パートナーから暴力を受けている人は18名(6.6%)であった。

質問紙調査の結果より、パートナーと同居中にDV被害を受けながら子育てをしている母親やDV被害を受けパートナーと別居し、子どもを育てている母親の其々の子育てのストレス状況や対処パターン、幼少期の暴力の目撃や実際の被害と、現在の被害との関連等が明らかになった。

###### 2) 母子の支援方法と関連機関との連携について

研究参加者は、5名であり、地域における子育て支援者、保育士より協力が得られた。継続的に関わることで、DV被害を受けて

いる母親は、自ら相談をしたりすることや、DV被害を受けている母子の支援は、生活が落ち着くまでに長時間かかるため、長い目で関わる必要性、行政や保健医療機関等と連携しながら、DV被害を受けた母子が安心安全に暮らせるように丁寧な生活支援、親業の支援が必要であることが明らかになり、今後、DV被害者の早期発見や早期支援、その後の連携について更なる調査研究及び検討を行い、地域において、DV被害を受けた母子の早期回復支援システムの構築の必要性が示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

藤田景子、周産期及び子育て期におけるドメスティック・バイオレンス被害女性と助産師の関わりの様相—1 事例を通して—, 日本フォレンジック看護学会誌, 2巻2号, 2016, 57-65. (査読有)

Keiko Fujita, Keiko Shimada, Challenges for Nursing with Regard to Domestic Violence Intervention; Nursing Practices in Medical Settings, Journal of The tsuruma health science society kanazawa university, 39(2), 135-143, 2015. (査読有)

[学会発表](計7件)

Keiko Fujita, Keiko Shimada, Mutsuko Takahashi, Experiences of Domestic Violence Victims Raising Children While Living with Abusers in Japan, the 31st ICM Triennial Congress. 2017.6.19.20.21. Toronto(Canada)

高田昌代、長谷川京子、酒井道子、藤田景子、泉房穂、子どものための安全な面会交流を考える, 第22回日本子ども虐待防止学会, 2016.11.25.26, 大阪国際会議場(大阪府大阪市)

Keiko Fujita, Keiko Shimada, Mutsuko Takahashi, Experiences of Domestic Violence Victims with Children after Separating from Abusers and Continued Effects of DV on those Children in Japan, 21st Nursing Network on Violence Against Women International Conference, 2016.10.28, Melbourne(Australia)

藤田 景子, 加納 尚美, 家吉 望み, 米山 奈奈子, 井籠 理江, 大屋 夕希子, 梶原 祥子, 長江 美代子, 古澤 亜矢子, 三隅 順子, 柳井 圭子, 山田 典子, フォレンジック看

護学を勉強してみよう!(入門編)暴力と健康に関する課題と看護実践について, 第35回日本看護科学学会学術集会, 2015.12.5, 広島国際会議場(広島県広島市)

Keiko Fujita, Keiko Shimada, Experiences of Women with Children Who Have Survived Domestic Violence, The International Confederation of Midwives Asia Pacific Regional Conference, 2015.7.20, Yokohama (Japan) 加納 尚美, 米山 奈奈子, 家吉 望み, 井籠 理江, 大屋 夕希子, 梶原 祥子, 長江 美代子, 藤田 景子, 柳井 圭子, 山田 典子, 暴力と健康に関する課題とフォレンジック看護の実践について考える, 第34回日本看護科学学会学術集会, 2014.11.29, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

Keiko Fujita, Keiko Shimada, Examination of an Educational Method to Promote Japanese Midwives' Effort Against Intimate Partner Violence, ICM prague 2014.6.2, Praha(Czech)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

藤田 景子 (FUJITA, Keiko)  
金沢大学・保健学系・助教  
研究者番号: 60587418

##### (2)研究分担者 なし

##### (3)連携研究者 なし

##### (4)研究協力者 なし